

Takashi
Sugawa

Banksia

Trio

Ancient Blue

1. **Blue in Green** (M.Davis)
2. **Nowheresville** (T.Sugawa)
3. **Ancient Blue** (T.Sugawa)
4. **Uncompleted Waltz** (T.Sugawa)
5. **Armeria** (S.Ishiwaka)
6. **Jomon Dance** (M.Hayashi)
7. **Kothbiro** (A.Ogata)
8. **Mimoza** (S.Ishiwaka)
9. **Trapezoidal Dance** (S.Ishiwaka)
10. **Song for Nenna** (F.Yasuda)
11. **Anemos** (T.Sugawa)

Produced by Akiomi Hirano

Recorded at Studio Dedé in Tokyo on 29 July 2020
Recorded & Mixed by Shinya Matsushita (Studio Dedé)
Mastered by Akihito Yoshikawa (Dedé AIR)

Art Direction & Design : Hiroshi Kurisaki
Photograph : Takeo Hibino

須川 崇志

TAKASHI SUGAWA

contrabass, cello,
electric bass, mbira, bells
Takashi Sugawa plays
Singular Bass on track 7

林 正樹

MASAKI HAYASHI

piano

石若 駿

SHUN ISHIWAKA

drums, percussion
Shun Ishiwaka plays
Bonney Drum Japan &
Istanbul Agop Cymbals

Banksia Trioの“バンクシア”は花の名前です。オーストラリア原産で、野火で実が燃やされたときにだけ、種子がパチパチッと弾け出て地表に播かれるという世にも珍しい花。このちょっと不思議な命の繋ぎ方を知ったときにピンと来ました。

ゼロ地点から音楽がはじまり、その後に出るべくして立ち現れるメロディやビート。この過程を経て放たれる、いわば“そうせざるを得ない一音”には、とても力強い必然性と説得力があります。まさに生を繋げるために火を捉えるバンクシアの生き様とリンクする瞬間です。自らを燃やすことで得られるエネルギーをトリガーにして、次世代へと種を繋ぐバンクシア。自分が出したいと願う音、やりたいと思う音楽の形を、この花の生きる姿の中に見つけました。

林正樹と石若駿は、この音楽的なチャレンジと一緒に飛び込んでくれる大切な仲間であり、ともに新たな“種”を見つけてくれる稀有なミュージシャンです。予定調和は要らないけれど、かといって無理に火をつけにいったところではいい音楽にはなりません。あくまで自然体をキープしながら、3人のエネルギーが燃えさかる瞬間をとらえて新たな種を放射する。それができるのは、ふたりが未知の可能性に対して常にオープンだからです。

このCDにもそんな場面がたくさん収められています。是非、ご自身の感性で探してみてください。

須川崇志




“ファーストアルバムの発表を契機に、バンクシア・トリオは恒久的なユニットになりました。サウンド面でも、3人の意識の上でも。多忙なふたりをつかまえて継続的にライブをやっているし、曲も書き続けています。彼らの顔を思い浮かべながら曲を書くのがとにかく楽しいんですよ。やればやっただけ発見があるし、どんどん深くなっていく。最高の仲間です”

“あのふたりとやっていると、時間がゆったり流れていく。もちろん「遅い」わけじゃなくて、逆です。スピードが出ているのに速く感じないんです。だからリラックスして演奏できるし、周りの景色もよく見える。すぐれたドイツ車とおなじで、プラットフォームとしての性能がズバ抜けているんです。しかも絶えず進化している”

須川崇志

Takashi Sugawa

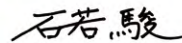


“常に全体のサウンドを考えながら、一方では
自分の表現世界をしっかりと確立しているふたり。
2つのベクトルを瞬時にバランスさせているんです。
しかもあれだけエネルギーに満ち溢れた音を
放っているのに、ぼくが大切にしている
「ピアノの響き」をちゃんと共有してくれている。
音を出すときはいつでも「その先にある風景」を
模索しつづける彼らの姿勢に、
音楽家として心からリスペクトしています”



Masaki Hayashi

“このバンドはメンバー全員がコンポーザー。
音楽的なスキルが高いから、
はじめての曲でもどンドンできる。
しかも、いざ3人で演奏をはじめると、
作曲した本人が想像していなかったような
展開に発展していく。ごく自然のうちに
「新しい扉」がどンドン開いていく。
そこがすごいところだし、だから楽しいんです”



Shun Ishiwaka